明治図書選書 9

子どものためにではなく共に

福井 達雨編

治図書選書 9

子どものためにではなく共に

福井 達雨 編

〔編者紹介〕

福井達雨（ふくい　たつう）

昭和7年，滋賀県近江八幡市に生まれる。昭和31年，同志社大学神学部を卒業。学生時代より障害児の教育と差別問題に取りくむ。昭和33年，大阪基督教学院で，教育心理学を専攻。昭和37年，多くの人の協力により，重い知恵おくれの子どもの施設，止揚学園を設立する。現在，京都保育専門学院で障害児問題の講座をもち，京都教育大講師でもある。

止揚学園は共同体制を持つ施設であり，障害児差別に対する抵抗運動，教育権運動をおこすなど，真摯な活動を続けている。

その間，韓国，東南アジア，西欧諸国，及び日本国内の講演に東奔西走。中日新聞社会福祉賞，京都新聞社会福祉賞，小原教育賞など数々の栄誉をうけ，特に韓国からは臨床心理学会名誉会員に選ばれ，同国父母の会より表彰をうけている。

〈著書〉『僕アホやない人間だ』『生命をかつぐって重いなあ』『子供に生かされ子供を生きる』『僕たち太陽があたらへん』『僕たち心で勝つんや』（以上柏樹社），『アホかて生きているんや』（教文館），『嫌われ，恐がられ，いやがられて』（明治図書），など。

現住所　滋賀県神崎郡能登川町佐野885 止揚学園内

子どものためにではなく共に
—止揚の保母たちと親の記録—　〔明治図書選書 9〕

1979年2月初版刊
1979年5月再版刊

編　者　福井達雨
発行者　藤原政雄
印刷所　株式会社西田整版

発行所　明治図書出版株式会社
東京都中央区入船3-3-11　〒104
電話 551-8266 〈編集(551)8269〉
振替東京 6-151318

(分)3337(製)0 899 09(出)8308

子どものためにではなく共に＊目次

――止揚の保母たちと親の記録――

Ⅰ はじめに……七
——厳しくて温かい止揚学園の保母たち——
1 女ではなく男や……八
2 一人やったら負けるやろうなあ……一三
3 つぶされていく理想……一六
4 人権を守るお茶くみ……一八
Ⅱ 保母たちの記録……二三
一 子どものウンコやオシッコにまみれて……二四
1 障害児問題は、差別問題や……二五
2 韓国人を父として……二八
3 親のエゴに苦しめられて……三一
4 ウンコって美しいんやで……三三
5 生命の大切さ……三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

6　一番美しい場所……四三
7　子どもたちに変えられた私……四六
二　母親と私の心の隔りを越えて……五三
1　他者を生かす……五三
2　すぐ、やめなさい……五六
3　初めての見合い……六四
4　一人、仲間が減ったなあ……七〇
5　母親と私の、隔りの中で……七四
三　子どもが、は止めになって……七八
1　温かい二つのできごと……七九
2　ある子どもの死……八一
3　失敗した、はじめてのデイト……八四
4　きみ、ルーズになったで……八五
5　自分の子どもに心をとられ……八七

6 うち、七人やで……八九
7 いやがらせに　涙し……九二
8 男と女のくいちがい……九八

四

どろんこ道を歩いてみたら……一〇七

1 少しの不注意で生命が……一〇八
2 頭にふりかかったうどん……一一一
3 機械が、子どもの心を殺す……一一四
4 理論の裏づけのある体験主義……一一六
5 自然の中に教材は山の様にある……一一八
6 どろんこ道を歩いてみたら……一二一
7 両親のうらぎり……一二一
8 悲劇の教育……一二六
9 埋めたい空間……一二七

五

僕たちが大人になったら……一四一

1　変な子どもやなあ、恐い……一四三
2　子どもに近寄らない校長先生……一四六
3　にわとりは、コケコッコや……一五五
4　この子どもたちは神様ではない……一六三

Ⅲ　父母たちの記録……一六七

一　その別れの日のために……一六八
1　その別れの日のために……一六九
2　お母さんと一緒に、安らかな死を……一七〇
3　めぐりあった場所……一七四
4　私は、弱い母親でした……一七六
5　教育は、人です……一八二
6　僕たち、同じ人間やないか……一八四

二　大阪空港で出会ったかなしみ……一八九

1　ドアにはさまれた親子……一九〇
2　くやしさと歯がゆさ……一九一
3　娘に助けられて……一九三
三　しんどい人の荷を共に……一九五
1　眠り姫といわれ……一九六
2　知恵おくれと宣告され……一九八
3　止揚学園に出会って……二〇〇
4　六歳になったら……二〇三
5　おむつからパンツへ……二〇四
6　しんどい人の荷を共に……二〇六
あとがき

I はじめに

——厳しくて温い止揚学園の保母たち——

1　女ではなく男や

はなやかな四月、新入生の子どもたちがランドセルを背中に、嬉しさをあふれさせて小学校に行く姿を、重い知恵おくれの子どもたちがうらやましそうに見ていることに気付いた。そして、「なんで、私ら学校に行かれへんのや、悲しいなあ」と、話のできない子どもたちの声なき声が私たちにつきささり、タジタジとなり（どうしても学校に行かせてやりたい）と、心が燃え、一人の教育者としての心情から私たちの住んでいる町の教育委員会や、学校と激しいぶつかり合いをしている頃のことであった。

ある日、一人の保母が、私のところに息せききって走ってきた。

「町長さんから電話ですよ」

町長から今まで一度も電話などもらったことがない私は（なにごとなんや）と、急いで受話器をとった。その耳元に大声がガンガンと響いた。

「君が福井君かね、君ところの保母は、けしからんなあ」

「何がけしからんのですか」

「もし、わしの息子が君のところの保母のような女と結婚したら離婚をさせるやろうなあ」

その怒鳴りつける声の中で、なにがなにやらさっぱりわけがわからない。

「町長さん、もう少し冷静になってくださいよ。何をそんなに興奮したはるんですか」

よく話を聞いてみると、町長が「重い知恵おくれの子どもが学校に入ると、みなが迷惑をするし、町の子どもの学業や行いが悪くなるから困る。このような子どもは止揚学園でしっかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と子守りをし、外に出すべきでない」という、教育を無視した、差別発言をし、それを「悪かった」とも云わず「大変な人権無視、差別発言だ」とも思わず、当然としている姿に怒った保母たちが、激しく怒鳴りつけたらしいのである。

「町長さん、町長さん」と、町の一番のお偉らさんとしてたてまつられている、人口一万五千位の小さな田舎町の町長、一度も女性などから怒鳴られたことなどなく、大きなショックを感じたのであろう。

「わしは、今まで女に大声で注意をうけたことなんか経験したことがない。君のところの保母は、女のやさしさを持っていないんか。あれは女でなく、男やなあ」

話を聞いているうちに、私はだんだんと怒りがこみあげてきた。

「町長さん、そんなことをおっしゃっても私はやっぱり止揚学園の保母たちは、やさしい女らしい人たちやと思いますわ」

「どうしてなんや」

少しの間、電話の中で話がとぎれた。

「どうしてって町長さん、あなたは今まで自分が損をしてまで他者のことや、町民のことを考えたり、一つの取り組みをしたことがありますか。恐らく頭の中に次の選挙の票のことが一杯で、少数グループの人たちの云うことが正しいと思っても、多数の人たちの損になったり、反対があると多数に従われるでしょう。そしていうべきことをいわず、黙して円満な人格者になり、人に好かれ自分の立場を守られるでしょう。でも止揚学園の保母たちは違うのです。重い知恵おくれの子どもたちや少数の人たちが差別をうけ、生命をおかされたり、真理が曲げられ

ることがあると、自分が損をしてでも後にひきません。保母たちが大声をだしたのは、この子どもたちを幸福にしようと必死な思いで町長さんに、怒りをぶつけたんです」

「しかし、あまりにも乱暴で失礼やないか、あれは恐ろしい人間たちや」

「そうですか、教育者というものは、町長さんと違って、誰でも心の片隅に燃えるような火を、燃焼をもっているんです。子どもの生命がおかされると、その燃えているものが押えられなくて、黙っていられなくなるんです。私は自分が嫌われても、恐がられても、町長さんからこんな悪口をいわれても、子どもたちの防壁になろうとしている保母たちの姿は、本当にやさしくなければ、あつい涙や心がなければ持てないものだと思います。この保母たちこそ、女らしい本もののやさしさを持った女です。このような教育者、保母を止揚学園がもっていることは誇りです。町長さんもこの保母たちのように、一人になっても嫌われても、真理を貫ぬく行動をし、町の人たちの大反対にあっても、重い知恵おくれの子どもたちを差別しない真の人間行動の中で、子どものためにではなく、共に歩んでいただけませんか」

ガチャン、怒ったように電話がきれた。その響きの残る一時、文字では表現できない、なんともいえない思いが残った。

さて、止揚学園の保母たちを、「恐い」と表現する人も多い。

しかし、私が仕事に疲れ、応接間のソファーに横になってウトウトと寝てしまうことがある。ハッと目を覚ますと、誰がしてくれたのかわからないが、知らない間に私の身体に毛布がかけられている。その毛布から、女のやさしさが立ちのぼり、ホノボノとした気持にさせられる。

夜おそく講演が終って帰ってくる。クタクタに疲れた身体を浴室に運んでいくと、お湯が満

ちあふれ、白いタオルが温かくおいてある。その白さの中で疲れがとび去り、エネルギーが心に満ちてくる。こんな時、（明日からもがんばるぞ。そしてリーダーは子どもたちや、保母たちの人権がおかされたら、生命をかけてでも守らんとあかんのや）と決断をもたされる。

原稿に書きづかれボンヤリとしていたり、人から悪口をいわれ悲しくなってションボリしている私に、そっと手をおいて肩をもんでくれたり、「先生、お酒をのもう」といってきてくれたり、こんなやさしい内面的な思いやりをもった保母たちが、どうして「女やない、男や」「恐い人たちや」といえるであろうか。この人たちは、本当に女らしい女なのである。

障害児の差別撤廃という行動をしている時は、確かにはげしい。しかし内面に日本の女の良さをもった人たちなのである。

私は、「止揚学園の保母たちは恐い」という表現は間違いだと思っている。この保母たちは、「恐い」のではなく、「厳しい」のである。「恐い」と「厳しい」とは、ぜんぜん意味が違う。「恐い」とは、冷たく利己的で、みにくさという要素を含んだ言葉である。そこには冷えびえとした恐ろしい世界がある。しかし、「厳しい」とは、他者と共に生きる、温かくて美しい世界である。

温かくて美しいものは独立しては存在できない。厳しくて激しい世界があって、はじめて温くて美しいものが生まれ育ってくるのである。いいかげんな世界に美しいものが育つはずはないのである。

ともすると差別撤廃運動や、労働運動などをしているグループは、カサカサと乾いたドライな性格になりやすい。しかし、止揚学園グループが長年、理想を失なわず夢をもちみずみずし

い心や目に見えないものを大切にしてこられたのは、この保母たちが支えてくれたからである。

止揚学園の保母たちは、厳しくて、激しくて、温くて、美しい人たちである。心に燃えるようなあついものをたぎらせ、そして静かな深みをもった人たちである。また、真理や、子どもたちの生命がおかされると、絶対に妥協しないでたたかい続ける保母たちなのである。

2　一人やったら負けるやろうなあ

先日、中学生が見学にきて質問をした。

「ここの保母さんたちは、恋愛をしたり、おならをしたりしますか」

「そらするよ、君らと同じ人間やもん」

と答えると、何かホッとしたようだった。この中学生は、このような仕事をしている保母たちは、けだかい神様に近い人間で、自分とはぜんぜん違うのだと思っていたのだった。「強い人たちだ、私たちとは違うのだ。だから私たちはこんな仕事はできない」と保母たちを別格あつかいにしてあこがれ、尊敬する人も多く、この保母たちに出会うだけで感きわまって涙を流す人たちもいる。

しかし、二十四時間共に生活していると、あちらにでもこちらにでもいるという普通の平凡な娘さんたちなのである。

身も心も捧げた男性に失恋し、ポロポロと涙を流し、御飯を食べないでやせ細り、（自殺をするのではないか）とハラハラさせる保母、夫と意見のくい違いがおきて、苦しみ真剣に離婚

を考え私に怒られる保母、ハンサムな男性の見学者がくると、ソワソワして落着かなくなる保母たち、映画俳優のうわさ話に時を忘れてしまう女性でもある。そして何人かが集まると、しゃべるわしゃべるわ、その間に次から次へと食べものを口に放りこむ。とにかくその姦しさと食欲に、「お前らは色気が少しもなくて、食気ばかりやんか。こんな姿を見たら、十年の恋も一べんにさめるわ」と叫びたくなる。朝食をたべ、十時にお茶をのむ。十二時になると昼食、三時にはおやつ。六時に夕食をたべ、十時に夜食がお腹に入っていく。夜寝床に入ってから、食べものの夢を見、ヨダレを流している。これが止揚学園の保母たちだといっても過言ではないのである。

美人の保母、不美人の保母、スマートな保母、おでぶさんの保母、お乳の大きな保母、胸の板のような保母、大根足の保母、きゅうり足の保母、ゲラゲラ大口をあけて笑う保母、テレビや漫画を見てすぐ涙を流す保母、強い保母、弱い保母、あわて者の保母、時には仕事がつらくなって家に逃げ帰り、もう二度と帰ってこない保母もいる。

さて先日の夜、保母たちに囲まれお酒をのみながら悦に入っている私に、色々な質問がとんできた。

私はお酒をのむとどんなに怒っている時でも、人が変ったように楽しくなり、ウキウキとおしゃべりになってしまう。話はだんだんと結婚や、将来のことになっていった。

「先生、私たちは止揚学園にいるかぎり、この子どもたちの生命を守ったり、差別にたいして真面目にとりくんでいるけれども、結婚をしてここをやめた時、やっぱりこんな生き方ができるんやろうか。学校教育や社会の問題に疑問をかんじたり、身体で汗を流して、純粋に問題解

決にぶつかれるんやろうか。私はなんだか、自信がありませんわ」
「そうやなあ」
私は、考え考え答えた。
「恐らくできへんやろうなあ。僕らは今、少数派の子どもたちの立場から発言し、考え、行動してるわなあ。しかし多数派の人たちは、強者論理で生き、少数派の立場はなかなかわかってくれへんわなあ。多数派は、自分が少しでも損をするようなことはしよらへん。そんな社会構造の中で、多数派に一人で対決してもたちうちができへん。『理想と現実は違うで』と一蹴され、負けてしまうやろうなあ。恐らく君たちは止揚学園をやめて数年もすれば沈黙し、妥協し、自分の生活を守るのに四苦八苦して、今僕らがたたかっている知的偏重主義の町の人たちと同じになっているのと違うやろうか」
「そうでしょうか。でもここでやれることが、他の所でもやれへんことはないと思いますが」
「よう考えてみろ、ここには仲間がいてくれ、一人ぼっちやないわなあ。多数派の人たちからたたかれ、悪口をいわれ、疲れ果て、もう逃げだしたろうと思っても、みんなが励まし、慰め合い、いたわりあっているわなあ。そして、また立ち直れるけど、一人ぼっちやと何度かのぶつかり合いの中で、最後には疲れどうにもならなくなり、負けてしまうやろうなあ」
「先生みたいな人でも、やっぱし一人やったら負けますか」
「僕は別や、一人でも勝つでと、はったりをいいたいけど、それはやっぱしうそやなあ。負けるといったほうが正直やろうなあ」
「そうですか。でもそれでは余りにも悲しいわ。止揚学園に今いる意味がわからなくなってし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com